

第6学年「お茶小百景」の実践考察

堀井武彦

はじめに

- I 日本の美術教育の変遷
 - 1 美術教育黎明期の図画教育
 - 2 自由画教育の登場
 - 3 戦後民主主義と美術教育
- II 第6学年 題材名「お茶の水百景」A表現イの考察
 - 1 題材について
 - (1) 図画工作の卒業プロジェクト
 - (2) 題材設定の理由
 - (3) 題材の目標
 - (4) 題材の評価規準
 - 2 学習内容の考察
 - (1) 学習指導計画
 - (2) 学習の流れの詳細
 - ① 場所を探しながら主題の構想を掴む
 - ② 下描き描画材考
 - ③ 水彩絵の具の基本指導考
 - ④ 本題材におけるICT教育考
- III 題材名「お茶の水百景」の実践分析
 - 1 主題に選ばれた場所
 - (1) 芝生の校庭
 - (2) 雄飛（ゆうひ）の広場
 - (3) ライオン池，“やま”
 - 2 児童の表現活動の実際
 - (1) 「写生」に拘った活動
 - (2) 創作とユーモアの感覚と
 - (3) 主題の探究，発想の展開，自分なりの技法
 - (4) 発想の展開と表現様式の工夫
 - (5) 造形的な見方・考え方に基づいた表現の多様性
 - (6) 資質に裏付けられた活動の魅力
 - (7) イメージを切り取るという発想
- IV まとめにかえて

はじめに

お茶の水女子大学附属小学校（以下、本校）に筆者が着任して10年目を迎えた。着任当初、児童が校内の特色ある場所や施設にとっても愛着を示している姿が、それまで出会った東京都公立小学校の児童達との違いとして印象深かった記憶がある。そして、月日が経つごとに、本校児童の生活基盤が東京都23区内の広範囲に渡っており、それぞれの地域で同年代の児童と接する機会が少ないことが起因しているのではないかと考えるようになった。つまり、自宅の周辺で時間を過ごす遊び場や居場所に愛着を持ち得ない代償として、校内の各場所にその思いを託しているのではないかと考えた次第である。本稿は、この児童の実態及び性向を図画工作の学びの探究に活用することをねらいとして取り組んだ第6学年題材名「お茶小百景」（以下文中、本題材）の実践を基に、本題材の教育的意義やそこで培われる資質・能力について考察することを主旨としている。

I 日本の美術教育の変遷

本章では、日本の近代美術教育の変遷を概観しながら、本題材のような所謂「風景画」もしくは「写生」を活動内容とした題材に焦点をあてた考察を進めることにする。

1 美術教育黎明期の図画教育

幕末から明治期にかけた日本の近代化は、欧米諸国に多くのお手本を求めたことは言うまでもなく、西洋画を中心とした「美術」という概念すらなかった当時は、西欧文化の象徴として西洋美術そのものを受け入れる専門教育機関整備が喫緊の課題であった。明治4（1871）年に発行された『西画指南 前編 上下2冊』（川上寛編訳）は日本最初の西洋的図画教科書として知られており、R. S. バーン（英国）のThe Illustrated Drawing Book section I, IIの忠実な訳といわれている¹⁾。その影響を受けた画材の象徴として鉛筆画（西洋画的内容）があった。

この時期に始まった美術教育の学習内容は、基本的に手本画（臨本）を正確に模写する臨画が中心であったことは、伝統的な日本画の訓練方法が中国の南画等の優れた作品を模写することだった影響も考えられよう。しかし、「学ぶ」の語源が「まねぶ（学ぶ）」にあると言われるように、手本に倣うという欲求は、現在においても、技能向上の縁として、一般的に市民の意識に埋め込まれているのではないかと考えている。というのも、筆者が非常勤講師としてお茶の水女子大学の小学校教職課程の授業を担当した際、昭和初期の図画教科書に倣って模範画の模写を学生に体験させた後の振り返りの中の、「自由に描きなさいと言われるよりも、安心して取り組み、ほっとした。」という記述が印象的だったことに起因している。日本で普通教育として図画の学習が意識されるようになって100年以上の時を経た現在でも、必修教科の学習活動として「絵をかく」ことに漠然とした抵抗感を発生させる要因が潜在していることを想起してしまうのである。同じ「絵をかく」活動でも、理科の観察画には抵抗を感じないが、図画工作や美術の活動では足踏みをしてしまう傾向が少なくないという実態が、日本の教育文化の中で潜在し続けていると認識するのは、筆者の個人的な経験則による思い込みだけであろうか。合わせて、論の飛躍はあるが、黎明期ならではの新しい価値観への転換を象徴する、E. F. フェノロサや岡倉天心が提唱した『毛筆画』と川上冬崖らの『鉛筆画』との確執¹⁾は、現在の美術教育においても、図画教育の価値判断の問題として妥当な決着を得ることなく燻り続けているとも考えている。

2 自由画教育の登場

明治33年（1900年）の改正小学校令公布を契機に学制が変わり、西洋美術そのものを学ぶ専門教育から普通教育としての美術教育へ中心がおかれるようになった。この時期は、明治35年（1902年）に始まる「教育的図画」という理念と、大正自由教育の流れを汲む「自由画」の理念とが摩擦を起こしていたことが特徴とされている¹⁾。明治43（1910）年には、日本初の国定教科書『新定画帳』が普通教育の教科

書として発行された。『新定画帳』では、鉛筆画と毛筆画を統合的に扱った内容となっているが、現場での教授では、臨画教育が中心となっていたようである。

これに対して、山本鼎によって大正7（1918）年頃から提唱された「自由画教育」は、図画教育の基礎を自然との対話に求めることを基盤としていたため、所謂「臨画教育」とは相容れなかったと認識されている。「自由画教育」の広がり背景には、大正8（1919）年の長野県で2回開催された「児童自由画展」や、大正10（1921）年の『芸術自由教育』創刊（この年内休刊）などに加え、国産クレヨン普及などがあり、野外風景写生が自由画の題材として定着していったとされている¹⁾。この野外風景写生という活動は、平成29年告示新学習指導要領（以下、新学習指導要領）で「～表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。」²⁾とした教科目標との親和性を読み取ることができる理念である。従って、本題材や教科書題材「わたしの大切な風景」⁴⁾も、野外風景写生から派生した題材として読み取るならば、今日、一般的に図画工作教育の象徴的題材としてイメージが定着している実態も理解できる。つまり、手本に則る、写す「臨画教育」から自然との主体的な対話を基本とする「自由画教育」の美術教育における「自由」という概念の反映は、100年かけて市民権を得たと考えてもよいのではないだろうか。この「自由画教育」から派生した風景写生という題材が今日もなお、日本の美術教育の見えざる縁として潜在しているという認識は、本稿起案の契機となっている。

3 戦後民主主義と美術教育

昭和20（1945）年8月のポツダム宣言の受諾により日本は終戦を迎え、昭和21（1946）年日本国憲法公布、昭和22（1947）年3月に教育基本法と学校教育法が交付されて、民主主義を基盤理念とした戦後教育が始まることになる。美術教育においては、日本教育版画協会（1951年～）、創造美術教育協会（1952年～）等をはじめとする民間美術教育運動の活動が公的美術教育に影響を与えていくことになる。宇陀（奈良教育大学）は、「創美の設立時の宣言文には、『心理学の導入』『児童の生まれつきの創造力』『児童の個性』などの文言が盛り込まれ」¹⁾、V. ローエンフェルド、W. ヴィオラ、H. リード等の理念を拠り所として、無指導、無方法を標榜したとしている。その後、創造美術教育協会の動きを批判する形で、「新しい画の会（1952年～）」が活動を始め、「社会主義リアリズム芸術論を基礎とし～その方法とは、コップやフライパンとといった日用品、社会生活、昔話などの物語から題をとり、集団討議によって、個々の『認識』を深化させ、徹底的に妥協せず描いていく」¹⁾認識主義美術教育の理念が登場する。これらの民間運動の動きは、社会情勢の変化を伴いながら昭和40（1965）年代頃まで隆盛を見せるが、筆者の認識としては、学際的な論争はさておき、現在の教育現場では、それぞれの主張の受け入れやすい概念が「絵に表す」活動に息づいており、昭和・平成・令和の「自由画教育」を形成していると考えている。蛇足ではあるが、筆者がこのように断定するのは、僭越ながら、この昭和40年代に小学校時代を過ごしたことも影響しているのかもしれない。

更に時代を下ると、宇田は、「美術教育は、＜感性主義美術教育時代-昭和52（1977）～63（1988）年、平成元（1989）年～現在＞を迎えている。」¹⁾とする。その象徴として、昭和52（1977）年7月の告示の学習指導要領において、図画工作科に「造形的な遊び」が低学年に導入されたことを挙げている。スプートニク・ショック（1957年）以降、科学技術教育向上を目指した小学校・中学校学習指導要領が、試案ではなく文部省告示という形で法的拘束力をもって以来、系統性重視の実践を模索していた教育現場に、表現の総合性や身体性が重視され始められたとしている。直近の新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」を通して「何ができるようになるか」という資質・能力の育成に主眼が置かれるようになった。図画工作科の教科目標としては、「表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次の通り育成することを目指す。」とある。ここまでくると、「自由画教育」の理念との素朴な接点は捉えにくくなる。そして、題材としては現在でも存在感を持つ「写生画」の教育的意義の問い直しの必然性がおのずと高まってくる。そこで、次章から「お茶小百景」の実践分析を通して、これからの時代に求められる「絵に表す」活動の課題と可能性を考えていくことにする。

Ⅱ 第6学年 題材名「お茶の水百景」A表現イ の考察

1 題材について

(1) 図画工作の卒業プロジェクト

本題材は、3年前より図画工作における「卒業プロジェクト」の中に位置付けている。その内容は、表1に示した4つの題材で構成している。これまで、6年生に対しては、学校生活の様々な場面を通して最高学年としての自覚を促してきたが、それを、図画工作の学習に組み込むことはできないかという自問から構想した試みである。

表1

題材名	お茶小百景 4月～5月(10時間)	お茶の水焼 5月～6月(7時間)	12年後のわたし 9月～10月(10時間)	ドリームプラン 1月～2月(8時間)
教科目標の重点	教科の目標1(2)	教科の目標1(1)	教科の目標1(3)	教科の目標1(3)

表1は、まず、「お茶小百景」では、児童が慣れ親しんだ学校の風景(場所や場)に着目して小学校生活を振り返り、「造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想」²⁾する図画工作科の教科の目標(2)を題材の重点目標としたことを示している。他の3題材についても同様に意図的に教科の目標の重点化を示している。

「お茶の水焼き」では、敷地内の土を信楽粘土に練り込み、母校の自然との対話を楽しみ、「対象や事象を捉える造形的な視点について(略)、創造的につくったり表したりする」²⁾ことを重点目標とした。そして、「12年後のわたし」や「ドリームプラン」では、卒業のことが少しずつ現実味を持つ2学期から、漠然とはあるが自分の将来について考え始め、いよいよ卒業が目前に控えてくる3学期になると、主題の対象を個人から社会へと広げていくことを想定した題材配列を計画した。この2題材は、教科の目標(3)「楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う」を重点目標とした。

(2) 題材設定の理由

題材設定の着想は本稿冒頭に示した通りである。筆者が本校に着任当初、児童が校内の特色的な場所や施設に愛着を示していたことを教科書題材「わたしの大切な風景」と重ね合わせて「お茶小百景」と題材名を創作したことが始まりである。更に、副題材名に「命輝くお茶小お気に入りの場所」を付け加えた。これは、高学年になると、人物を描くことに抵抗感を示す児童が多いという実態から、児童本人を原則としながら、せめてキャラクターでもいいので、人の気配を絵の中に登場させるという授業者の切実な願いを重ねたものである。「自主協同」が本校の教育目標であるが、「協同」には他者の存在が前提となる。従って、絵の中に人物(たとえ児童本人だけでも)を組み合わせることでイメージの世界に他者の存在が想起されるのではないかと、との考えも重ねている。

以上のことから、本校児童が校内の特色ある場所や施設に愛着を示す性向を「対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解する」²⁾学びの探究に活用することを目指し本題材を設定した。

(3) 題材の目標

これまでの小学校生活を振り返り、校内の思い出や関心のある場所や施設などを基に発想したことを絵に表す活動を通して、形や色などの感じを捉えて主題の表し方について考える。

(4) 題材の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう態度
小学校生活で印象に残ることがらや場所を捉える造形的な視点について、自分の感覚や行為を通して理解するとともに、水彩絵の具を中心とした材料や用具を活用し、表し方を工夫して、創造的に表すことができる。	小学校生活で印象に残ることがらや場所の造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想することができる。	「お茶小百景」の活動に主体的に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする。

2 学習内容の考察

(1) 学習指導計画（全10時間扱い）

時間	活 動 の 内 容
1	・小学校生活で印象に残ることがらや関心のある場所を探しながら主題を構想する。 ・場所は複数箇所を組み合わせも可とし、人物（キャラクター等も可）の構成は必須とする。
2・3	・主題のイメージを基に、現場で下描き（鉛筆、スケッチペン、ボールペン等）をする。
4・5	・主題のイメージを基にして、色の感じを考えて、現場で重ね描きを意識した着彩を始める。 ・表したい感じに合わせて、筆の種類を使い分けや筆跡を工夫して着彩を進める。
7・8・9	・アトリエで場所の写真やタブレットの画像、その他の画像資料を参考にして製作を進める。 ・必要に応じてコラージュや他の描画材料を併用して、主題の効果的な表し方を工夫する。
10	・名札に題名、作品解説をまとめ、絵と一緒に台紙に貼り、互いに鑑賞し合う。

(2) 学習の流れの詳細

① 場所を探しながら主題の構想を掴む

本題材のねらいが小学校生活を振り返ることにあるにせよ、児童にしてみれば、印象になることがらや関心のある場所に対する思いが必ずしも絵に表すことへ昇華するとは限らない。思うように表現できず、活動が停滞することも想定できる。かといって、場所探しを際限なく続けても納得いく場所が見つかるとは限らない。従って、描く場所の選択に当たっては、場所への心情と表現を支える意欲との折り合いをつける思考力と判断力が求められる。その結果として主題を掴み、絵に表す表現力を発揮することになる。児童への支援としては、とりあえず選択することを促し、活動が停滞した場合は、その状況に応じて再検討することが「造形的な学びの心づもり」であることを伝えている。「造形的な学びの心づもり」とは、本校、図画工作部の研究テーマ（H26～H30）であり、「主題を掴むまでの過程において、発想や思考の転換を恐れない勇気をもって、表現したいことを自ら探し出すこと」³⁾と定義している。



図1

② 下描き描画材考

「下描き」という用語は、他分野における製造、制作工程の初発の段階として認識される汎用性のある言葉である。本題材では基本的に鉛筆を使うことにしている。近年、児童の筆圧が弱いことを指摘されるようになり、本校でもBの規格の鉛筆を使うことを推奨している。筆者が小学生だった50年前は、通常の学習用にはHBを使い、絵を描く時は4Bを使うことが不文律だった記憶がある。おそらく、絵をかく時は、濃くて柔らかい鉛筆で大まかな線の下描きをするという慣習が一般化したのであろう。そ

の他にも、下描きの線に趣を演出する描画材として、竹ペン又は割りばしペンを使って墨汁で描く技法や単色のクレヨンやパスを使うことも教育現場には定着している。しかし、表現様式として趣を演出するという価値観は児童の自然な欲求ではないし、一度描画した線をなぞる工程は、児童にとって表現ではなく単純作業の負担を課して意欲を減退させる懸念がある。更に、現在の児童を取り巻くデジタル化された視覚情報は、明確な図像が多い。これらの環境の変化を考慮して、下描きをなぞりたいという児童には、ボールペン又は耐水性のスケッチペンを準備している。もっとも、筆者は、いわゆる下描きをしなくても、より児童の表現欲求が反映されるならば、水彩絵の具で直接描き始めても問題ないと考えている。

③ 水彩絵の具の基本指導考

教科書⁵⁾では、水彩絵の具用具の使用方を小学校3年生から掲載している。一般的に専門家用画材としての水彩絵の具は、図2の固形透明水彩絵の具を指す。また、ガッシュと呼ばれる不透明水彩は、均質で斑のない仕上げが求められるポスター等の着彩に使用されて発達してきた。つまり、日本の学校教育で馴染みのある図3のチューブ入りの半透明水彩絵の具とパレットの組み合わせは、戦後、日本の絵の具メーカー⁶⁾が児童の発達段階に合わせて開発し、定着してきた背景があるので、水彩絵の具用具の基本指導という概念も日本の教育風土の一つと考えることもできる。

絵の具に限らず、用具の使用については、技術に偏ることなく、児童の思いを表現することに寄り添い、使いながら慣れていくことを旨としているが、教科書の題材の配列においても、純粋に水彩絵の具を中心に使用して絵で表す題材は、中学年以上では最大2題材程度なので、児童の実態に合わせてその都度、基本指導をくり返していく必要があると筆者は考えている。本題材では、基本的には図2の固形透明水彩絵の具の使い方に倣った方法を指導した。具体的には、図3の様に、パレットの小部屋に絵の具を並べ、必要に応じて絵の具をつぎ足し、混色した箇所は基本的に洗わず残しておき、次時では、その色をきっかけに前時のイメージを想起した活動を再開させるという方法である。この技術的な手立てを知ることによって、児童は透明水彩絵の具の特色である重ね描きを意識した着彩を進めやすくなる。勿論、筆者も児童の思いに合わせて、思いのままに着彩することも尊重してきたが、対象の固有色を混色することに時間を割き、ぬり絵の様に着彩し、児童の思いを十分に達成できずに活動が停滞する児童の姿を多く見て来たので、折に触れた水彩絵の具用具の基本指導の重要性を再認識している。



図2

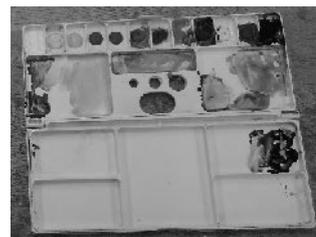


図3

④ 本題材におけるICT教育考

2(1)学習指導計画では、3時間で現場での下描きを完成させる計画であるが、実際には計画通りには進まない。かといって、児童が納得するまで現場で活動すると設定時間内に活動が収まらない。また、本題材は、対象を写し取ることをのみを目標としていない。感性を反映した創造性を組み込むことに重点を置いているので、図4にある対象の画像(写真)を活用して、4時間目からはアトリエで製作する計画をしている。それによって、対象を写しとることから画面を構成することへ児童の意識を促すことができるからである。さらに、図5の様なタブレットを活用すると容易に児童が必要とする対象の図像を入手することが可能となる。デジタルデータでは、拡大縮小も容易で、描画アプリを活用すると構図の構想の目安をつけることも可能となる。「自由画教育」によって、手本を映すという臨画教育から対象を直接見て「写生」という根本的な図画教育観の転



図4



図5

換から100年の時を経て、ICT教育の普及により、視覚情報処理や活用の土俵で図画教育そのものを問い直す段階にきていることは自明である。もっとも、写真技術やチューブ入り絵の具の発明によって、対象を写実的に再現する絵画表現様式から印象派へと変遷した美術史の流れを鑑みるなら、自然な流れと考えることもできる。

Ⅲ 題材名「お茶の水百景」の実践分析

1 主題に選ばれた場所

(1) 芝生の校庭

表1は、児童が主題として選んだ校内の場所である。合計が学年人数を超えているのは、複数個所を選んで構成したことを示している。思いの詰まった場所を一か所に絞りきれないことは自然な現象であろう。最も関心が高かった場所は、学年全体の46.8%の児童が選んだ図6の校庭である。2番目に関心が高い校舎概観と合わせると7割の児童が選んでいる。これには、本学年が入学した頃より校庭芝生化の成果が安定し始めたことも影響していると考えられる。東京23区内の小学校の校庭としては、緑に囲まれ、面積としても広い方である。又、本題材の活動時期は、4月中旬から5月中旬に向けた温暖な気候であり、本校の自然との対話を楽しむには願ってもない状況である。小学校生活の思い出の場所として感心が高いのは納得のいく判断である。

(2) 雄飛（ゆうひ）の広場

次に感心が高いのは、図7の雄飛の広場である。児童玄関から校舎内に入ってすぐのところの位置し、教室へ向かう児童が必ず通過する場所である。2階まで吹き抜けになっており、その壁面には、「雄飛」という題名のレリーフが設置されている。校舎の構造的な特色と合わせて、最も多く児童が通過する場所であることと、鳥が羽ばたくレリーフの主題を重ね合わせて、児童が主題に選ぼうとする着想は素直に共感できる。

(3) ライオン池，“やま”

図8のライオン池と後ろに面する通称“やま”は3番目に関心が高い場所であった。ライオン池はライオンの顔が噴水口になっていることで児童に親しまれているピオトープである。水ぬるむ頃になるとオタマジャクシを採取しようとする児童が池にはまり、靴やズボンを濡らす事故が発生するが、都心部にある本校の環境にあっては、自然の水棲生物を観察できる貴重な場所である。また、その後ろにある斜面は本校敷地の端になり、“やま”と呼ばれている。背の高い銀杏の高木を中心として樹木が茂り中腹には遊歩道がつくられている。また、“やま”の周辺にはジャングルジムや鉄棒、チャレンジロードと呼ばれるアスレチック遊具が設置され、全体が遊び場となっている。また、“やま”の裾野では、学年の行事でブロック竈をつくって、保護者とともに飯盒炊さんやカレーライスの炊き出しを行う場所として定着している。室内の学習活動とは異なる印象が埋め込まれている場所である。

表1

主題として選択した場所の集計 (第6学年 109名)						
	A組(28名)	B組(27名)	C組(27名)	D組(27名)	合計	対学年人数比 (%)
教室	3	4	1	0	8	7.3
音楽室	0	1	0	0	1	0.9
理科室	0	0	0	0	0	0.0
アトリエ	0	0	1	0	1	0.9
家庭科室	0	0	0	0	0	0.0
雄飛の広場	1	6	6	5	18	16.5
図書コーナー	0	4	0	2	6	5.5
PCルーム	0	0	2	0	2	1.8
放送室	0	0	0	1	1	0.9
保健室	0	0	1	1	2	1.8
体育館	1	1	0	1	3	2.8
電子ライオン池	2	1	2	1	6	5.5
プール	0	0	0	0	0	0.0
ピロティ	1	3	1	1	6	5.5
モール	1	2	1	0	4	3.7
校庭	20	10	12	9	51	46.8
校舎外観	8	4	8	5	25	22.9
ライオン池	4	4	6	3	17	15.6
自主運動	4	2	1	4	11	10.1
山	8	4	1	0	13	11.9
藤棚	1	2	2	1	6	5.5
ウサギ小屋	3	3	1	4	11	10.1
講堂	0	1	0	0	1	0.9
合計	57	52	46	38	193	177.1



図6



図7



図8

2 児童の表現活動の実際

この項では、本題材の児童の活動，所謂，児童作品（以下，活動）についての考察をする。筆者の観点としては，I章で示した大正期の「自由画教育」に始まった脱臨画主義から100年を経た図画教育の実際と図画教育の教育的意義を統合して考察を進めることにする。

(1) 「写生」に拘った活動

図9は，表現様式がいわゆる「写生」そのものである。作者は，図画工作の時間をとても楽しんでおり，常に自分なりの拘りをもって活動する姿が見られる。本題材では，校庭から校舎を望む視点から，校舎の全体像を自分の力を振り絞って誠実に写実した，純粋に作者の感性や美意識を反映した活動であると受け止めている。ここでは，水彩絵の具の基本技法が活かされており，透明水彩絵の具を彷彿する色調で着彩されている。評価規準の「知識・技能」と「学びに向かう態度等」が発揮された活動と捉えている。

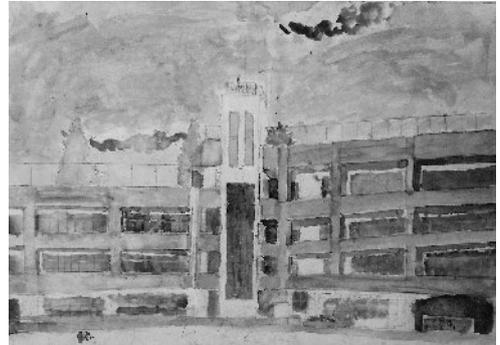


図9 「ぼくの楽園」

(2) 創作とユーモアの感覚と

図10は夜の校舎が主題である。夜という時間設定に創作性が加味され，純粋な「写生」ではないが，「写生」的造形要素が活用されている。本題材における過去の活動傾向として，時間設定が夜の場合，人物の描画を避ける意識が見え隠れしていたが，図10の部分を見れば，夜の校舎にお化けが顔を覗かせたり，集まったりするというユーモラスな物語の創作が組み込まれている。まず，この姿勢を「学びに向かう態度等」の観点で賞賛したい。そして，この創作性を加味した活動を「思考力・判断力・表現力」の発揮として受けとめた。この活動の様に，「写生」を活用しつつ，新たに物語性を加味するという発想の展開に教育的意義を認めるならば，本題材の今後に向けた可能性の1つであると考えている。



図10 「夜のお茶小」

(3) 主題の探究，発想の展開，自分なりの技法

図12は，学年で2番目に関心が高かった「雄飛の広場」に対する思いを表現した活動である。以下は，作者のコメントである。

「自由なお茶小 雄飛の広場」

雄飛の広場は，鳥が自由に羽ばたいている様子。そして，目標に向かっていく様子がよいと思ったので，雄飛の広場にしました。なので，私は，自由な感じで学校の中心のようなのだと感じました。だから，たくさんの子供達が自由に遊んでいる様子を表しました。

作者のコメントにあるように，着想段階で，主題をしっかりと捉えて構想し，発想を展開した活動であることが読み取れる。吹き抜け構造の2階から見下ろした構図に，木製レリーフの鳥が白い鳥となって壁から飛び出して広場の空間を自由に舞うという設定で構成されている。2階の廊下や1階の広場部分には，多くの子ども達が描かれている。そこには，学校生活で想定できる様々な子ども達の姿が描かれている。前項で紹介した，人物を描



図11 「夜のお茶小」部分



図12 「自由なお茶小雄飛の広場」

きたがらない高学年児童の傾向とは反対に多くの子ども達が描かれている。ここでは、下描き描画材料の項で紹介したボールペンの特性を活かした作者なりの方法で人物の動きを表現している。「知識・技能」が自分らしい方法で発揮された活動と読み取ることができる。

(4) 発想の展開と表現様式の工夫

図13は学年で3番目に関心が高かったライオン池を主題にした活動である。この活動で最初に見つかるのは、画面から浮き出た蝶である。画用紙でつくった蝶を貼り付けている。このような表現方法が教育現場に登場してから30年位経つであろうか、ピカソが試みたアッサンブラージュの手法が約100年の潜伏期間を経て小学生の絵画表現として受け入れられるようになったと言える。さらに、ここでは以下の作者の主題設定の理由にも注目したい。

「季節限定！ライオンサービス」

なぜライオン池にしたかと言うと、水が抜いてある期間だけ、2年生とライオン池でおにごっこをしたので、ライオン池をかきました。また、あまりお花が咲かないので、お花をたくさん入れました。葉はあまり色がかぶらないようにしました。

作者の下級生との交流の記憶を契機として、造形的な見方・考え方で発想を展開し、創造的な表現様式を工夫した姿勢と捉えることができる。つまり、作者は、ライオン池を主題の対象として創造力を働かせて、造形的な見方・考え方を探究した「思考力、判断力、表現力」を発揮したことになる。



図13 「季節限定！ライオンサービス」

(5) 造形的な見方・考え方に基づいた表現の多様性

図14は、本校の大きな行事の一つである音楽会の体験を主題にした活動である。児童の活動を画家の作品を鑑賞する視点で捉えることには慎重であるべきだが、まず、写真をコラージュしていることが目を引く。作者によると、多数の人を描画するのは大変なので、思い切って写真のコピーを貼り付けることを考えたそうである。また、音楽が流れる感じを五線譜や音符をリズムカルに配置し、存在感あるグランドピアノを画面の中心に構成する絵づくりは、秀逸な画面構成である。造形的な見方・考え方に含まれる多様性を象徴する、現代の「自由画」の一例として受けとめたい。



図14 「音楽の紙飛行機」

(6) 資質に裏付けられた活動の魅力

図15も前項以上に創造的な表現様式の活動であるが、教育の文脈を飛び越えた活動だと筆者は受け止めている。主題対象の「モール」と呼ばれる中庭は、6年生が1ヶ月前まで過ごした4階の5年教室の廊下から見下ろす位置にあるので、その視点から着想を得たのだろうと筆者は考えていたが、「花壇が中心にあることを強調したかった。」「お茶小に昔関わっていた人の想像(幻想)なので、現実とは違う世界観にした。」などの作者の思いを知ると、独善的な読み取りを慎まなければならないことを痛感させられると同時に、生得的な資質に裏付けられた活動であることを認めざるを得ない。教育の文脈で分析し切れないが魅力的な活動である。



図15 「幻想」

(7) イメージを切り取るという発想

図16の作者は、活動に込めた思いを、下記のコメントに凝縮しているのので、一先ず、参照されたい。

「ぼくらが描く始まりの場」

ぼく達が6年間描いてきたストーリーは、この1年生の入り口からスタートしました。毎日、平凡な風景を目にしながら、1、2、3と上がっていきました。絵の中では実際にぼくが絵を描いています。それには、ぼくが描いてあざやかにしてきたというメッセージがあります。

主題を物語仕立てに設定し、映像の1場面を切り取った様な構図になっている。まず、作者は登校時の想定した時間帯に合わせて登校し、デジカメをもって待ち構え、図17の画像を収めた。これは、「学びに向かう態度等」に支えられた姿勢と捉えられる。その前提として、主題を設定し、図像としてこの場面をイメージした時点で「思考力、判断力、実践力」が発揮されている。また、ICTを活用したアイデアスケッチの製作は「知識・技能」を発揮したことになる。ここに3つの資質・能力が相乗的に機能した活動の姿と捉えることができる。そして、感性に基づいたイメージを捉えることとは、具体的にこのような思考の様式を指すのではないかと考えることができる。



図16 「ぼくらが描く始まりの場」



図17 図16のアイデアスケッチ

IV まとめにかえて

本稿は、日本の図画教育の転換の契機となった「自由画教育」の流れが、今日も「写生」もしくは「風景画」という活動内容として図画工作科の題材に埋め込まれているという仮説に立って、「お茶小百景」の実践の自己分析を試みたものである。そのため、2020年度より本格実施される新学習指導要領の3本柱である「知識・技能」「思考力、判断力、実践力」「学びに向かう態度等」との対照を示して、一定の客観性の担保も試みた。それによって、本題材を通して「造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力」を具体的な児童の姿として抽出できると考えたわけである。成果として、児童の活動に対する筆者の評価観の表出は達成できたが、本題材の教育的意義の提示の言及に至らなかったことは今後の課題である。

本稿の結びとして、筆者が近年関わっている全国規模の絵画コンクール⁷⁾の審査を通して考えたことを紹介する。それは、全国から集められた作品群の中に、地域毎に定着している表現様式、あるいは特定の教授方法が反映された類型化した作品群の存在が印象に残り、教育現場は今、新たな「手本(モデル)」を欲しているのではないか、という問いをもったことである。「臨画教育」からの転換の契機となった「自由画」の登場から約100年の時を重ね、「自由画」の「自由」の概念を教育現場が十分に租借しきれずもて余してしまっているのではないかと考えた次第である。この状況は、創造性を謳う新学習指導要領の教育課程に取り組む際の図画工作科における重要な課題であると筆者は考えている。

【引用・参考文献】

- 1) 大橋 功 (2011)『美術教育概論(改訂版)』編著大橋功, 新関伸也, 松岡宏明, 藤本陽三, 佐藤賢司, 鈴木光男(日本文教出版), pp. 32-37
- 2) 文部科学省 (2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説図画工作編』(日本文教出版株式会社)
- 3) 「図画工作部会」(2018)第80回教育実習指導研究会発表要項, pp. 40-41, お茶の水女子大学附属小学校
- 4) 日本児童美術研究会 (2017)『みつめて 広げて 図画工作5・6下』(日本文教出版株式会社)
- 5) 日本児童美術研究会 (2017)『見つけたよ ためしたよ 図画工作3・4上』(日本文教出版株式会社)
- 6) <https://www.craypas.com/products/regular/watercolor/> 株式会社サクラクレパスホームページ
- 7) 公益社団法人教育美術振興会主催 第79回全国教育美術展